



目の前の「いのち」との対峙 ～研修での学びを通して～

学校教育課 参事 澤 居 則 晶

3月11日、東日本で未曾有の大震災が発生しました。その日の前任校は授業が行われない日であったため、60人前後の生徒しかいませんでした。強い揺れが収まり外に避難していた私たちは、3時頃、ドーンという爆発音と共に、かつて映画で見たことのある雪崩のような不気味な音を耳にしました。その後すぐ、様子を見に行っていた先生が、「水門が決壊した。水が来るから、すぐに3階に避難しろ！」と叫びながら走ってきました。学校の周りには水が押し寄せ、外に出ることすら出来なくなりました。闇と共に夜が来ると、目の前を流れる北上川の対岸で、街を焼く橙色の光だけが、唯一私たちの目に入ってくる灯りでした。震度3～4程度の余震が頻りに繰り返される中、不安な情報ばかりが飛び交い、鳥肌が立つような思いを味わいました。そして夜が明けて水が少しずつ引くにつれ、惨状を目の当たりにすることになり、私たちは「生きる」ための活動を必死で行うことになりました。

「死」の恐怖からは解放された3～4日後、電話が使えない中で、少しずつ生徒の安否確認が進められました。1人、また1人と無事が確認されるたび、胸をなで下ろして職員室の先生方と喜び合いました。しかし、どう手を尽くしても連絡がつかない生徒が何人もいました。不安を紛らわせるために都合の良い想像をしつつ、無事を信じていたのですが、犠牲になってしまった生徒が数多く出ました。ある吹奏楽部の生徒は、津波に追われる中、自分が担当していたトロンボーンを必死で守りながら逃げたそうです。遺体安置所で再会したとき、傍らに楽器がそっと置かれていました。みんなと演奏するために、必死で守り抜いたのかもかもしれません。家ごと津波に流されてしまった子は、「お父さ」という一言にも満たないメールを、残された最後の時間を使って父親へ送っていました。前夜に喧嘩したまま仲直りも出来ず、仕事に出てしまったお父さんの悔しそうな泣き顔が目について離れません。幼い妹を守るため、逃げている途中で背負っていた祖母を泣く泣くその場に置いていかなければならなかったという生徒もいました。祖母に、「これからあんたたちは、いっぱい生きなきゃいけないの。だから、お願い。お願いだから、私をここに置いていきなさい。水がそこまで来ているのが見えないの！」と、何度も何度も言われ、身を切る思いでの決断だったと言います。

私たちは、日常生活を取り戻しつつあります。恐ろしかった記憶も、少しずつ過去となり、また笑顔が戻ってきました。その一方で、あの日、あの時、あの恐怖のまま、永遠に時が止まってしまった人たちもたくさんいます。彼ら彼女らと私たちと、いったい何の違いがあるのでしょうか。私は違いなどどこにもないと思います。ただ単に、津波の押し寄せる場所にいたか、そうではないか。あるのはその差だけだと思います。震災を経て「丁寧に」生きるようになったこと。これは私が私の目で様々なものを見て、私の頭でたくさんのことを考えた結果たどり着いたことです。皆さんに押しつけるつもりはありません。ただ、皆さんにも様々なことを感じて生きてほしいのです。これからも、たくさんのことを考え、感じながら過ごしてほしいと祈りつつ、話を終えたいと思います。

【講義資料 一部抜粋】

過去に受けた研修の中で、一番印象に残っているのが「リスクマネジメント」についての講義でした。上記資料（一部抜粋）を読んだだけで涙が止まらなくなり困ってしまいましたが、その結果導き出した結論は、私たちが毎日対峙しているのは、目の前にいる子どもたちの大切な「いのち」とあるという当たり前のことでした。これからの教育では答えのない課題に対して、最善解を導き出せる能力を身に付けさせることが求められます。目の前にある事象だけでなく、その背景や全体を俯瞰する力が求められます。

しかしそれ以前に、「いのち」に対する尊厳なくして、教育などありえないと考えます。あらゆる場面で我々教員の力が試されている時代です。その局面を乗り切るためにも、教員として常に学び続け、それを日々の教育活動に繋げるといった意欲は絶対に必要です。しかし、それ以前に、子どもの「いのち」を大切にするという姿勢が、子どもや保護者との信頼関係を構築するうえで欠かせず、教育活動を行うための大前提であるという事実を、教員として常に意識し続けなければならないと考えます。



【第1回】5月16日(金)

テーマ：『保育者としての心構え』

【講師】ももか保育園 園長 田中 和哉 氏



第1回目の研修は『保育者としての心構え』をテーマに、子どもたちが安心して過ごすことができる園づくり、子どもたちにとって保育者の存在の大切さを日常の保育実践の中から丁寧にお話しいただきました。

子どもの特性を理解し、子どもにとって何が一番必要かを考えていくことの大切さや、子どもを安心させる言葉かけや支援の方法など、多くのことを教えていただきました。

【受講者の声】

- 「こだわり」に対するかかわりについて、園での子どもたちの姿を踏まえながら考えることができた。自分自身余裕がなかったり、子どもの情緒が安定していなかったり、いろいろな要因はあるが、全てを受け入れる、子ども（その一人一人）が安心できる環境をつくるための関わりができていないように思う。難しい問題ではあるが、子どもとの信頼関係づくりをしていくためにも考えていきたい。
- 個々の発達をしっかりと把握し、対応することを心掛けていきたいと思います。環境や情緒によって問題が起きることをふまえてフォローしていくことが大切だと思いました。支援が必要な子どもの対応では、強いこだわりをどこまで受け入れていいかの不安もあるのですが、周りの職員たちとしっかり情報共有しながら日々の保育にあたりたいと思います。

【第2回】5月27日(火)

テーマ：『自然とのふれあいを楽しもう』

【講師】元園長 神門 則子 氏



第2回目の研修は「自然との出会い」の意義を講義とネイチャーゲームなどの体験を通して学びました。自然を感じることを難しく捉えるのではなく、園庭など周りにある自然を意識し、自然の中での発見や感動、不思議さを感じる子どもたちの感性を大切に見とっていくことが小学校以降の学びにつながっていくことを教えていただきました。そして、保育者自身が“自然とのふれあいの楽しさ”を実感した実りの多い研修となりました。

【受講者の声】

- 普段過ごしている園庭であるはずなのに、注意深く見ることで新しく発見する自然が多くありました。より園庭をじっくり見ていこうと思います。フィールドパターンの活動では、見方による違いを感じました。子どもたちの発見にも「そう思える」「確かに」と共感していきたいと思えました。保育室にある自然物と聞かれた時は少しドキッとしました。園庭は自然であふれているのに、保育室にはないことに気づかされました。保育室にも積極的に自然物を取り入れていきたいです。
- 私にとって「自然」=「生き物の世話」のイメージが強く、カエルやザリガニが苦手なこともあり、苦手だと思っていたのですが、楽しく研修を受けることができました。草花の色、形など、自分にできるところから、自然を取り入れ、楽しむ保育をしていきたいと思います。自然を意識して見る、言葉にするなど、保育者の関わり大切さを改めて感じました。研修を楽しく受けたことを、保育の中で私も楽しく、子どもも楽しくいかせるようにしたいと思っています。

令和7年度 教育研究奨励事業

今年度は、各校園より個人研究・共同研究合わせて14編の研究奨励論文の応募がありました。それぞれの研究を支援するために、滋賀大学教職大学院准教授の北村拓也氏を講師に迎え、5月に「研究の進め方講座」、10月に「研究のまとめ方講座」を実施しました。

研究の進め方講座



日時：令和7年5月9日（金）

場所：栗東市役所2階第1会議室



研究奨励論文の進め方に関する研修を実施しました。研究を進めていくポイントとして、研究主題を考える・研究計画を考える・実践する時に大切にすることなど、それぞれに具体的な例を示して、分かりやすく教えていただきました。

【受講者の声】

- 研究の主題など、大まかにしか考えられていなかったが、今回の講座を受けてイメージを膨らませることができた。特に、北村先生が実践されている例（マッピングやテキストマイニングなど）を紹介していただけたことで、今後研究したい内容を整理できそうだと感じた。
- 具体的に研究の目標の立て方を教えてもらうことができ、参考となる有意義な時間でした。今回教えてもらった書き方や参考文献の探し方を参考にし、論文の作成に活かしていきたい。



研究のまとめ方講座



日時：令和7年10月31日（金）

場所：栗東市役所2階第4会議室

研究奨励論文のまとめ方に関する研修を実施しました。研究をまとめる時に困っていることや大切にしたいことを交流しながら、まとめ方の具体的な方法や論理的な文章にするために必要なことを教えていただきました。講座の後は、多くの受講者が抱いていた不安や迷いが解消され、意欲的に取り組んでいこうとする姿に変わっていきました。

【受講者の声】

- どのように研究をまとめていくのか、不安な点が多かったが、今日の講座を受けて、全体像と部分をしっかりと考えて構成していきたいと思った。今までの自分の論文は事実と主張だけで、理由付けが抜けていたので、もう一度見直し筋道の通った文章にしていきたい。
- どうやってまとめていこうかと漠然としていましたが、道筋が見えました。まずは、レジリエンスについて、わかりやすく文章にしたいと思います。また、自分の考えていることが、論理の3要素のどこに当てはまるのか分類することから始めようと思います。



『心を動かし、自ら考え、夢中になって遊び込む子ども』 ～人とのつながりの中で育まれる力とは～

栗東市立治田保育園

本園は、生きる力のねっこを育むために、非認知能力の一つである“人とつながる力”を保育の軸におき、園内研究や日々の保育に取り組んでいます。日常の中でも、1歳児の子ども同士で目を見つめあって互いの気持ちを分かち合おうとする愛しい姿が見られます。



また、異年齢同士のつながりの中でも、憧れの気持ちやそっと寄り添う優しさを感じる場面がたくさん見られます。子どもたちの“人と響き合って生きていきたいんだ”という気持ちを私たち大人がまず感じ、就学前の子どもたちから学ぶことを大切にしています。

地域とのつながりにおいては、宅地化が進んでいる治田学区ではありますが、地域の方から「おくらの花が咲いたよ」や「さつま芋と一緒に植えようね」と子どもたちに声をかけていただいたり、豊かな体験をさせていただいたりしながら、子どもたちは四季を身体いっぱい感じる事ができています。これからも人の温かさにふれて育ち合っていきたいと思えます。



『子どもまんなか 主体的に学ぶ子どもを目指して』

栗東市立治田西小学校

本校の特色の一つに縦割り活動があります。異学年の児童同士が協力し、よりよい人間関係を築くことをねらいとして、縦割り遊びや縦割りで行う集会等に取り組んでいます。全校児童のアンケートをもとに、子どもの発想、子どもの発信を大事にした各委員会の様々な取組も行っていきます。



また、人とつながり、対話を通して考えを広げたり深めたりする活動を大切にしています。デジタルツールを活用することで分かりやすく伝えたり、意見を共有したりしています。

これからも、子ども一人一人が輝き、互いのよさが発揮されるように、「子どもが主役」(主体)「みんなが主役」の学校づくりに取り組んでいきます。いじめ防止の素地となる人との関わりを深める取組を推進していきたいと思えます。